

平成 27 年度 国際関係論専攻 調査研究助成金（春学期申請分）
調査・研究報告書

受給者：B1566835 葉山 亜美

所属：上智大学グローバルスタディーズ研究科国際関係論専攻博士前期課程

研究課題：海女文化のグローバリティ―日韓の国際交流の観点から―

調査背景

申請者は卒業論文で、東日本大震災後の被災地における子ども支援を事例とし、聞き取り調査をもとに、国際的な活動を行う市民団体と地域に根差した市民団体の支援活動に着目した研究を行った。「子ども支援として両市民団体はどのような活動を提供しているのか、また活動に至るまでにいかなる過程があるのか」を問うことで、国際的な市民団体と地域市民団体それぞれの特徴を明らかにすることを研究目的とした。

卒業論文の作成の過程で、地域の市民団体の活動には、その団体の歴史や文化が大きく関係していることが次第にわかってきたのだが、実際には地域社会特有の文化、歴史、風潮と市民団体の活動を関連づけられなかった。東日本大震災後の被災地における子ども支援研究を通じて見出したことは、両団体の活動の差異とそのプロセスだ。地域の市民団体に関して、活動に至る要因が被災者の立場に起因するものに限定されていた。しかし特定の地域を拠点とした団体が活動や行動指針を決定する際、地域文化が大きく関与する。この課題から、申請者は社会と文化、人と文化にとの関係、とりわけ、文化形成における人の関わり合いに着目することにし、海女文化に関する研究を選択した。

研究目的

本研究の問いは「済州島からの海女移民は日本の海女文化形成にどのような影響を与えたのか。」である。この問いから、海女文化形成における日韓の関係を明らかにしたい。この問いを設定した理由は以下の通りだ。第一に、海女文化は長い歴史を有していることが挙げられる。長い年月を通じて、海女文化がどのように継承されてきたのか、その過程を考察できると考えた。第二に、近代韓国の海女の日本への移住の歴史と海女文化への関与が挙げられる。日本の海女文化は日本人海女により発展されたものであると捉えられことが多い。だが、文化の形成に韓国人海女が関与してきた事実を無視することはできない。古来より続く伝統に加え、人の移動の歴史を背景に持つ海女文化は、文化の形成と人々の関係を見出すのに適切な事例であると言える。海女に関する情報や現状を知るため、日本の海女文化の中心地である、三重県にて夏季休暇中にフィールドワークを実施した。

調査日程・方法・内容

① 調査日程:9月6日～9月11日

9月6日:移動日・調査準備日

9月7日:「海女小屋はちまんかまど」にてインタビュー、海女関連の施設訪問

9月8日:海の博物館にてインタビュー、博物館内の見学

9月9日:台風の影響により、ホテルに滞在

9月10日:石鏡漁港周辺の散策

9月11日:移動日

② 方法・内容

海女さんや海女文化関係者に対するインタビュー調査を実施。インタビュー時間は2時間程度。質問内容は出稼ぎの経験や歴史、海女文化の現状、保護活動などである。とりわけ出稼ぎに関して詳しく質問し、文献ではわからない経験談を聞くことができた。本調査は海女さんと海女関係者に対するインタビューのみならず、以下のことも加えて実施した。①海女に関する資料館、博物館の見学②海女が崇拝する神社への参拝③漁港の散策、である。これらを通じ、海女文化の歴史や地域との関係、現状を把握することを目的とした。

調査・研究報告

対馬での出稼ぎ経験に関するお話を伺うことができたことは今回の調査での大きな成果といえる。なぜなら対馬は前項で述べたように、日韓海女の出稼ぎ先として重要な場所であり、文化交流の窓口と呼べる場所だからだ。今回お話を伺った元海女であるN氏によると、対馬には韓国人海女さんが来ていたそうだ。けれども、N氏の場合、韓国人海女と関わる機会にめぐまれなかったという。出稼ぎ先の交友関係は、漁場の所有者と同じ海岸で漁をする海女に限定される。このことから、N氏が他の漁場の海女と関係を築くことは難しいと推測できる。

しかしながら、この調査結果には以下の問題点が挙げられる。第一に交流の機会にめぐまれなかったということはどの程度のことを表わすのか曖昧であることだ。何ををもって交流をいうのか、その定義が定かでないということが曖昧さを生じさせた原因である。しかしながら、交流の機会がめぐまれないことを交流が無かったと判断することも出来ない。これは二つ目の問題点に関連することだが、今回のインタビューはあくまでも「鳥羽の海女」の経験に基づくものであり、現地（出稼ぎ地）の海女の視点ではないからだ。

第二に対馬の海女の視点が欠けていることが挙げられる。この調査結果は出稼ぎに行った海女の経験に基づくものだ。そのため、雇用される側から見た対馬の出稼ぎの状況しか把握することができない。しかしながら、出稼ぎ者を迎える立場の人たちとでは、関わり方に違いがあるだろう。残念ながら今回の調査では、そこまでを明らかにすることはできなかった。

本調査で課題を基に研究テーマと研究の方向性を再考したい。

